
淫マユリの身体に効く薬

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涅マユリの身体に効く薬

【Nコード】

N4308G

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

11番隊副隊長草鹿やちるは、涅マユリが開発した新薬の被験者を頼まれたのだが・・・

(前書き)

この小説では、オリジナルの斬魄刀及び始解・卅解名や、薬の名前が出ます。

その斬魄刀や薬の説明をしておきます。

轟冷覇^{ゴレイバ}…本作オリジナルの斬魄刀である草鹿やちるの斬魄刀。氷雪系の斬魄刀で、解放すると斬ったものを凍結させ砕く事ができる。

解号は『凍漬^{いてづ}け、轟冷覇』。

阿修羅^{アシユラ}…本作オリジナルの斬魄刀である更木剣八の斬魄刀。炎熱系の斬魄刀で、解放すると6本の刀が本体から分裂し飛んで行き、敵を斬り裂く。解号は『暴れろ、阿修羅』。

炎魔羅刹^{エンマラセツノアシユラ}之阿修羅…本作オリジナルである更木剣八の卅解。卅解すると6本腕にそれぞれ刀を持った巨大な阿修羅が現れ、敵を斬り裂く。ちなみに『炎』の部分は本当は『火が3つの漢字』なのだが、携帯表示ができないため炎で書かれている。

擁抱薬^{ヨウホウヤク}…本作オリジナルである薬で、涅マユリが開発した新薬。飲むと飲んだ時から24時間だけ体が大きくなる。ただし小さな子にしか効果がない。

瀨靈廷

瀨靈廷内を1人の少女が歩いている。

彼女の名は、草鹿^{クサジシ}やちる。

見た目は幼い子供だが、こう見えてもれっきとした11番隊副隊長である。

「おいしく、この飴♪」

やちるが13番隊隊長の浮竹^{ウキタケ}十四郎にもらった飴を食べながら歩いていると、後ろから12番隊副隊長である涅^{クロツチ}ネムがやって来た。

コツ・・・

「草鹿副隊長・・・」

「あ、ネムネム♪! どうしたの?」

「マユリ様がお呼びでございます。一緒に研究室に来ていただけますか?」

やちるの妙なあだ名をスルーして、ネムは言う。

「うん、良いよ♪」

やちるはそう言うと、ネムについて行った。

12番隊 研究室

「マユリ様、連れて参りました。」

「来たかね、草鹿やちる。待っていたヨ。」

やちるを呼んだこの男が、ネムの父親であり、技術開発局の局長も兼任している12番隊隊長・涅マユリ。

護廷13隊1のマッドサイエンティストである。

「マユリン、今日は何の用なの？ お菓子ある？」

「・・・お菓子なら、ネムにこないだ現世の浦原商店で買って来させた金平糖がそこにあるヨ。食べると良い。」

「わーい♪」

やちるは金平糖を取りに行き、食べ始めた。

「そろそろ本題に入ろうかね。今日私が君をここに呼んだのは、私が開発した新薬の実験体をやって欲しいからだヨ。」

「新薬の実験体？ 毒薬とか？」

「イヤイヤ、そんな物じゃないヨ！大体君に毒を盛ろうものなら、私が更木剣八ザラキケンバチに斬られかねないヨ・・・」

「だってマユリン、そういう事普通にやりそうなんだもん・・・」

「私もそう思います、マユリ様・・・」

「やちるはともかくネムまで！？久々にショックだヨ・・・」

マユリはショックを受けたのか下を向いた。

「まあとりあえず飲んでくれたまえヨ。ホラ。」

マユリはピンク色の液が入った小瓶をやちるに差し出した。

「うん。」

やちるは小瓶のフタを開け、中身をゴクゴクと飲んだ。

ゴクゴク・・・

「・・・？特に妙な味でもないし、別に何も変わらないね・・・」

やちるは首をかしげる。

「ネム、浦原商店で買って来た鏡を持って来てやちるの前に立ててくれ。」

「はい。」

ネムは部屋の奥から鏡を引っ張り出して来ると、やちるの前に置いた。

トン！

「ほえ？鏡？・・・ん？」

やちるはしばらく沈黙した後、鏡に見入った。

「・・・え？ア、アタシ・・・大きくなってろー！！？」

突然の自分の成長に、やちるは驚いた。

「ど、どうなってるのこれ！？マユリン！！」

「驚いたかネ？これが私が開発した新薬・・・『擁抱薬』ようほうやくの効果だよー！！」

「擁抱薬・・・？」

「その薬を飲むと、身体を通常成人の姿に成長させる事ができる・・・まさに画期的な新薬なのだヨー！！」

「フーン・・・これって効果いつまで続くの？」

「飲んでからきっかり24時間だよ。ちなみに副作用や代償は特にないヨ。」

「そうなの。」

「折角ですから、その姿で瀨霊廷内を散歩して来てはいかがですか？」

「ウム、1日限りの姿を思う存分楽しんで来ると良いヨ。」

「うん、わかった！じゃあね、マユリン！ネムネム！」

やちるはそう言うと、12番隊研究室を後にした。

大きくなったやちるは、上機嫌で瀨霊廷内を歩いていた。

「（世界観が変わると、何か良い気分♪）」

ちなみにやちる、行く先々で男性死神達の視線を釘付けにしている。

「（さっきから男性死神達の視線が気になるなあ・・・どうしてアタシばかり見てるのかなあ？）」

理由は言わずもがな。

やちるはそんな事を考えながら、10番隊へとやって来た。

「ひっつゝん！遊びに来たよ♪」

やちるは笑顔で叫ぶ。

「あ？」

10番隊隊長・日番谷冬獅郎ヒツガヤ トウシロウは、めんどくさそうに出て来た。

「何だよ、草じ・・・し？」

冬獅郎はやちるの名字を言いかけて、固まった。

ほどなく副隊長の松本乱菊もやって来る。

「どうしたんですかあ、日番谷隊長・・・」

「オ、オマエ・・・草鹿やちるか？」

「うん、そうだよ？」

「・・・」

冬獅郎はやちるのある1部分をマジマジと見つめている。

「な・・・何よ、人の事ジロジロ見て・・・」

しばらく沈黙が続く。

次の瞬間、冬獅郎は鼻血を吹き出した。

ブーッ！！

「ひ、ひつつん!？」

「ひ、日番谷隊長!？」

驚くやちると乱菊。

「あ、あうう・・・」

冬獅郎はそのまま倒れ込んだ。

ドサッ!

「た、隊長!?!」

「し、失礼しました!?!」

やちるは一目散に逃げ出した・・・

やちるは続いて、8番隊舎に来ていた。

「ヤッホー、ナナッチ! シュンリン!」

「あら、会長?」

「おんやあ、その髪型はもしかしてやちるちゃんかい?」

やって来たやちると、8番隊隊長である京楽春水と8番隊副隊長である伊勢七緒が話をしていた。

「一体どうしてこんな姿に？」

「マユリンの薬で、一時的に成長してるの。」

「そ、そうなんですか・・・」

七緒は啞然とする。

「フーン。それにしても・・・」

春水はやちるをマジマジと見た。

「な・・・何？」

「こうしてみると、成長したやちるちゃんもカワイイね。相手がいなかったら口説いてるトコだよ。」

「そ、そりゃどうも・・・」

やちるは赤面する。

「ちょっと、隊長？」

七緒が春水を睨む。

「な、何かな七緒ちゃん・・・」

「隊長、私が好きって言うてるクセに・・・浮気する気ですかあ！？」

「ご、誤解だよ七緒ちゃん！！例えばの話で・・・」

「今夜は寝かせませんからね！！」

「し、失礼しました・・・」

やちるはとぼちりを受けるのを恐れ、そそくさと逃げ出した。

やちるは11番隊舎に戻って来ていた。

「フウ、やっぱりここが一番落ち着くなあ・・・って・・・」

やちるはまたも、男性死神達の視線を釘付けにしていた。

「う・・・また視線が・・・」

やちるは赤面しながら、11番隊舎に入った。

「ただいま、つるりん、ユミリン・・・」

「お帰りなさい・・・て、草鹿副隊長！？」

「どうしたんっすか、その格好・・・」

11番隊第3席・斑目一角と第5席・綾瀬川弓親は、やちるの変貌振りに驚いていた。

「マユリンの葉で大きくなっちゃって・・・」

「一角、弓親ー！ 剣八いるか？」

死神代行の黒崎一護が、11番隊舎にやって来た。

「イ、イツチー？」

やちるは後ろを振り向く。

「オ、オマエ・・・やちる、か・・・？」

「う、うん。マユリンの葉で大きくな・・・」

「フーン・・・」

一護はやちるをジッと見た。

「涅隊長って、こういうのが好きなのか・・・」

「んで？ 更木隊長に何の用だよ一護？」

「ああ、剣八と剣の勝負がしたくてな・・・一角、どこにいるか知らねえか？」

「隊長なら、ちょっと瀟霊廷の右側にある森に出かけてるよ。何か、

新手的虚ホロウが出たらしくてな・・・」

「虚か・・・」

一護は顔をしかめる。

「イッチー、アタシが呼びに行つて来る！」

「1人で大丈夫ッスか？オレと弓親もついて行つた方が・・・」

「ツルリン、心配しないで。アタシは大丈夫だから！」

そう言うのと、やちるは11番隊隊舎を飛び出して行つた。

やちるは森の中を走っている。

「剣ちゃん！どこー！？」

やちるは叫ぶ。

すると、突然大きな足音が聞こえてきた。

「剣ちゃん？」

やちるは足を止める。

しかし、現れたのは剣八ではなかった。

一角が言っていた、例の大型虚である。

「これがツルリンの言ってた虚・・・お、大きい・・・」

『シャアアアア！！』

虚は雄叫びをあげる。

「（も、もしかして剣ちゃんやられちゃっのかな？だとしたら、アタシが仇をとらなきゃ！！）」

やちるは斬魄刀・轟冷覇ゴレイバに手をかけた。

いつもはやちるが小さいため引きずっている彼女の斬魄刀だが、大きくなっている今は腰に差してある。

「凍漬いそげけ！轟・・・」

やちるが始解しようとした次の瞬間、虚が伸ばしてきた触手が彼女の斬魄刀を弾き飛ばした。

バシィ！！

「キャアッ！！」

斬魄刀が吹っ飛び、遠くの地面に突き刺さる。

ザクッ！

「しまった！轟冷覇が・・・」

やちるは斬魄刀を取ろうと走った。

すると虚はそれを待っていたかのように、舌をやちるに伸ばす。

シャツ！

「キャアアアア！！」

グルグルグルグル・・・

やちるは虚の舌に捕まり、グルグル巻きにされてしまった。

虚はやちるを引き寄せる。

「うゝん、うゝん！！」

やちるはジタバタともがくが、全く効果がない。

『アーン♪』

虚はやちるを食べようと、口を大きく開ける。

「（剣ちゃん、ゴメンナサイ・・・仇とれなかったよ・・・）」

やちるは悔しさのあまり涙を流す。

虚がやちるを飲み込もうとした、その時だった。

「暴れろ！阿修羅^{アシユラ}！！」

剣が6つ飛んで来て、虚の背中に突き刺さったのは。

ドスドスドス！！

『ギャアアアアア！？』

虚は痛さに耐えきれず、やちるを放す。

パッ！

その一瞬のスキをつき、虚を攻撃した何者かはやちるを抱え地面に降り立った。

ザッ！

「大丈夫か、やちる？」

「け、剣ちゃん！！」

そう、虚を攻撃しやちるを助けたのは、虚に殺されたと思われていた11番隊隊長・更木剣八^{サラキケンバチ}だったのである。

やちるは嬉しさと涙が溢れた。

「オマエ一体どうしたんだ？体は大きくなってるし、虚に襲われてるしよ・・・」

「え、えつと・・・話せば長くなるんだけど・・・」

「ま、話はあの虚を片づけてからにするか。」

そう言うのと剣八はやちるを地面に降ろし、斬魄刀を構え直す。

『シャアアアア!!』

虚は剣八とやちるに襲いかかって来た。

「キャアアア!!」

やちるは悲鳴をあげる。

「オレの後ろから離れんなよ、やちる!!
パンカイ 卍解・・・暴れろ!!
エン 炎魔
マラセツノアシユラ 羅刹之阿修羅!!!!」

剣八は卍解した。

6本腕の巨大な赤き阿修羅が、虚の前に現れる。

ズオオオオオ!!

そしてそれぞれの手に持った6本の剣を振るい、あっという間に虚を細切れにした。

ズバババババ!!

『ギャオオオオオ・・・!!』

虚は息絶え、魂となって消えていく。

シュオオオオオ・・・

剣八は斬魄刀を腰に差した。

チャツ！

「やっぱり剣ちゃん、強い！」

「じゃあ、なぜこんな姿になったのか話してもらおうか・・・」

「えっと・・・マユリンの作った薬で大きくなったの・・・」

「マユリが原因かよ・・・」

剣八はため息をつく。

「で、何で1人であの虚を倒そうとした？オレが来るのが後1歩遅かったらオマエ、虚に食われてたんだぞ？」

「だ、だって・・・剣ちゃん、あの虚にやられちゃったと思って・・・それならアタシが仇とらなきゃって・・・」

「そうか・・・オレのために頑張ろうとしてくれたのか・・・」

剣八はフツと笑うと、やちるの頭を撫でる。

「1人で頑張ろうとしたのはホメる。だがな、これからは1人だけで無茶しようとすんな。オマエが死んだら、みんな悲しむんだぜ。」

「一角も弓親も、一護も・・・オレもな。」

「・・・うん、わかった・・・」

「んじゃ、帰るとすつかやちる！」

「うん♪」

やちるは剣八の背中に乗った。

剣八は瀨霊廷に向けて歩き出す。

いつの間にかやちるは剣八の背中で寝ていた。

「やちるのヤツ、寝てやがる・・・まったく、オレがどんだけ心配したと・・・」

剣八が愚痴ると、やちるの寝言が聞こえてきた。

「剣ちゃん・・・好きだよ・・・ムニャムニャ・・・」

「・・・フツ・・・」

剣八は黙々と歩を進める。

その表情は、いつも鬼神の如き強さを見せる剣八とは思えない微笑んだ笑顔だった。

1週間後

「フーン、こんな薬開発したんかマユリのヤツ・・・」

廃工場のような場所で、ヴァイザードの1人である平子真子^{ヒラコ シンジ}は瀧靈廷から送られて来た12番隊の通信販売カタログを読んでいた。

真子が見ている『こんな薬』というのは、先日マユリが開発しやちるが最初の被験者になった『擁抱薬』の事である。

『擁抱薬…この薬を飲むと、飲んでから24時間だけ体を大きくする事ができるヨ！ただし小さな子じゃないと効果はないヨ。』

「小さい子やないと効果はない、かあ・・・そういやこないだ、ひよ里のヤツが織姫の胸の大きさに嫉妬しとったなあ。アイツは否定しとったけど・・・」

真子はカタログを見ながら呟く。

「やちるもこの擁抱薬で24時間だけやけど巨乳になったて一護が言うとったし・・・あのまな板みたいなひよ里の胸も、この薬飲んだらちったあマシになるんやないかなあゝ！ハハハッハッハッ・・・」

「・・・誰がまな板みたいな胸やってえ・・・？」

「そら、いつもワイの事ハゲとか言うて蹴りとか入れまくる、チビな猿柿ひよ里の事・・・」

真子は笑いながら振り返り、一瞬で固まった。

そう、真子の後ろにはヴァイザードの1人・猿柿ひよ里が立っていたのである。

「ゲッ・・・ひよ里・・・」

真子は冷や汗をかいた。

「真子い・・・ようもウチの胸まな板やとか言うてくれたなあ・・・」

ひよ里は拳をワナワナと震わせている。

「ヤバ・・・逃げよ!!」

真子は足早に逃げ出した。

「待たんかコラァー!!」

ひよ里がすかさず後を追う。

「・・・何やってんだ？あの2人は・・・」

「どうせまたシンリンがヒヨリンを怒らせたんじゃないの？」

「相変わらず乙女心がわかってないねえ・・・」

「真子のドアホが・・・」

買い出しから帰って来た六車拳西・久南白・鳳橋楼十郎・矢胴丸リ
さらヴァイザードの面々は、真子とひよ里の光景を呆れながら見て
いた。

この後ひよ里に追いつかれた真子が、彼女の斬魄刀でボコボコにさ
れたのは言うまでもない・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4308g/>

淫マユリの身体に効く薬

2010年10月26日11時00分発行